子曰唯上知与下愚不移

これは孔子の言葉を残した論語の中の陽貨第十七 四百三十七にあります。日本語に読み下すと、「子曰く、唯上知と下愚とは移らず」となり、通常使う日本語ですと、「生まれつき頭の悪い者は、幾ら努力した処で、生まれつき頭の良い者を超えることは出来ない。と、孔先生は仰っています。」となります。我々の経験の中で、愚かな者が急に賢くなって、賢い者を上回った例を知らないので、永らくこれに疑問を抱く者は居ませんでした。石井勲博士は幼児教育を通じてそれは誤解であると考えました。「上智と下愚とを分かつのは、生まれつきではなく、その幼児期の言葉の教育に係る。」と主張しております。残念なことに著書に残してありませんが、晩年の講演会では屢々取り上げていました。

一方、言葉を学ばなかった例と学んだ例は著書で紹介しています。

狼に育てられた少女

乳児の時から狼に育てられ、幼少期に人間の言葉を一切学ばなかったアマラとカマラの話、石井博士は著書「日本語の再発見」の「第一章 言葉」などで紹介しています。

『1920年、インドの村で、狼に育てられた二人の少女が発見され、シング牧師が引き取って育てました。アマラは間もなく死にましたが、カマラは約十年間生き、推定年齢十七歳まで養育されました。』

養育の始め、カマラは四つ足で走り回り、食べ物を口で直接食べ、昼は部屋の隅で寝て、夜になると起き上って遠吠えをし、人間らしい感情を全く見せませんでした。言葉を一言も話せなかったのは言うまでもありません。

シング牧師は、言葉の教育に努めましたが、その習得状況は極めて遅く、十年

間に習得した言葉の数は僅か45語に過ぎませんでした。

然し、僅か45語の習得でも、日常会話ができ、嬉しい時には笑顔を見せ、悲しい時には涙を流して泣いたということです。』

石井博士は、アマラとカマラを紹介するこの一文の終わりで、「まことに言葉は人間を人間にする働きを有することがよく解る。」と述べ、「人間らしい人間になるためには、何よりも先ず人間らしい言葉が、とりわけ美しい言葉が必要なのである。」と、結んでいます。

『カール・ヴィッテの教育』

表題はドイツの片田舎に住む牧師カール・ヴィッテの著書名で、息子のカール・ヴィッテに対する教育実践の記録です。石井博士は此れを「日本語の再発見」の「第一章 言葉」の「■言葉の重さ」などで紹介しています。

『父親のカールは、当時の人が誰一人考へていなかった「幼児教育の重要性」とりわけ「言葉の教育の重要性」を深く信じていて、これを自分の子に実践しました。その結果、息子のカールは、九歳でライプチヒ大学に入学して四年間数学を専攻し、十三歳で素晴らしい論文を書いて哲学博士の学位を獲得、続いて法学を専攻して十六歳の時に法学博士の学位を獲得すると同時に、ベルリン大学の教授になりました。』

父親のカールは、日頃、「子供を早くから教育すれば、たいいていの子供は非凡な人間になれる。」と、主張していましたが、それを人々に実証するために、わが子を育てて見事に成功し、自分の日頃の主張を実証したのです。然し、世間の人々は彼の主張を信じず、「カールは生れつきの天才だから、九歳で大学に入れた。」と言って、教育の結果であるとは認めなかったのです。

父親のカールは、自分が子供の幼児期に施した教育法を本にすることを嫌っていましたが、「それは人類にとって貴重な、是非とも必要な仕事なのだから。」と、高名なペスタロッチが強く懇請したので断り切れず、息子のカールが13歳で哲学博士になって国中の評判になった翌年の1814に著述したそうです。』

言葉を覚えて上知の仲間入り

前述の2つの例は極端ですが、幼児期から効果的に言葉を学習して、優しく美しい言葉を沢山身に付けば、必ずや上知の仲間入りができるでしょう。先ずは保護者がお子様との会話を重んじ、語彙形成の支援を心掛けて下さい。

更に、この言語能力習得に欠かせないのが漢字である事も、石井勲博士の主張する処です。漢字は仮名やアルファベットと異なり、言葉の意味を端的に表していますので、頭の中に具体的な印象を形作り易いのです。言葉を教える際に漢字も一緒に提示すると更に良いでしょう。是非ともお子様を上知の仲間に入れてあげて下さい。

大人に比べて体力的に劣る幼児ですが、言葉の学習能力は大人が遠く及ばない程優れています。幼児期に機会を得て、多くの言葉を習得した者が、社会から上智と認められるのです。幼児期を過ぎて右脳活性が低くなってからは、言葉を身に付けるための努力は桁外れて辛いものになります。例えば、外国語の学習で辛い思いをしたのは、大人になってから始めたことに因るのです。

賢愚の相違は「生まれつき」ではありません。「幼児期に身に付けた言葉の多寡」に依るのです。

館長の独り言

上知与下愚不移

副題に掲げたのは論語の一節で、石井勲が晩年の講演で取上げていた題材です。日本語では、「生まれつき頭の悪い者は、生まれつき頭の良い者を超えられない。」となります。賢愚が逆転した例を見る事が無いので、疑う者は誰も居ませんでした。

石井勲は孔子の考えの誤りを指摘し、「それは生まれつきの相違ではなく、幼児期の言葉の学習の相違から来る。」と言っています。

石井未来館館長 石井峻

<http://ishii-miraikan.com>